December 2022
No.2022-005-a

芸術と心の癒し―近世ヨーロッパ美術史研究からの小論

平川佳世（京都大学文学研究科）

はじめに

京都大学人社・文理融合プロジェクト「未来創成学の挑戦―ポストパンデミックと共創力―」の共同研究者として、これまで、多くの研究会やシンポジウムに参加する機会を得た。そのなかで、美術史を専門とする私が特に興味をもったのが、医療現場にアートを導入するいわゆる「ホスピタルアート」に関する研究発表や活動報告である。例えば、森合音氏は、「四国こどもとおとなの医療センター」におけるホスピタルアートの実践について報告されたが、当センターでは、病や死をめぐる悲嘆からの心の癒しを得る一つの糧として、森氏が代表を務める NPO アーツプロジェクトのメンバーに加え、医療従事者、ケアを受ける方々やそのご家族も参加して、病院壁面に花の絵を描いた、という[1]。

自らを取り巻く世界が根底から崩壊するような痛みや喪失のなか、ふと目にした路傍の花に得も言われぬ感動を覚える。私たちの多くがそうした経験をしたことがあるのではなかろうか。こうした、おそらくは心の回復の小さな一歩となる得も言われぬ心の動きを私たちが分かち合うためには、絵に描くことが最適である。なぜなら、言語化しえない、すなわち、明瞭な思考に落とし込めない心のあり様を伝える最良の手段が、絵を描く、音楽を奏でる、踊りを踊るといった、言語を必要としない表現行為だからである。絵画、彫刻、音楽、舞踏、等々、総じて芸術とは、概念化されえない認識を記録し、伝達し、共有し、追体験するために人類が生み出したコミュニケーション・ツール、すなわち、情報伝達手段である。それゆえ、芸術との触れ合いは、言葉にすることすら苦痛な悲嘆と向き合う契機を私たちに与えてくれる。こうした、現代社会における芸術と心の癒しの関係が本プロジェクトに属する様々な分野の研究者、実践家たちによって提示され、私も感銘を受けた[2]。

翻って、私が研究する近代以前のヨーロッパ美術において、芸術と心の癒しや悲嘆からの回復はいかなる関係性を有していたのだろうか。これは、あまりにも壮大かつ難解なテーマで、その全容を明らかにすることは容易ではない。それゆえ、本稿では、私が専門とする 15 世紀末から 16 世紀前半のドイツ美術を代表する画家、版画家であるアルブレヒト・デューラー（1471―1528 年）の作品に焦点を絞って、この壮大なテーマ

---

[1] 森合音「自然の声に耳を澄ます―生命体としての病院―」第 4 回こころの健康づくりシンポジウム『未来を創る―Art と Care の対話』（日本赤十字豊田看護大学ヘルスプロモーションセンター主催、京都大学こころの未来研究センター、および、人社・文理融合プロジェクト「未来創成学の挑戦―ポストパンデミックと共創力―」共催、豊田市後援）、2021 年 12 月 18 日、オンライン開催。

[2] ただし、芸術には、盲信、恐怖、憎悪、嫌悪といった負の情動をも喚起する力があることも、私たちは忘れてはならない。

を考察する端緒としたい[3]。そもそも、絵をめぐっては「絵を描く」「絵を描いてもらう」「絵を見る」という三つの行為が想定される。この三つの行為は同一の人物によって行われる場合もあれば、別個の人々によってなされる場合もある。つまり、悲嘆と向き合うために自ら絵を描く場合もあれば、誰かに絵を描いてもらうこともあるし、すでに描かれそこに存在する絵を見つめる場合もある。この点を念頭に、デューラーの作品を道標として、前近代のヨーロッパにおける絵と心の癒しのあり様を考えてみよう。

１．「絵を見ること」と心の癒し

本稿で論ずる心の癒しなるものを、現代の医療現場におけるアート活用の様々な取り組みに準じて、「病や死に際する重篤な心の痛みの緩和」と定義するなら、まず知っておきたいのは、前近代のヨーロッパにおいては、キリスト教の信仰に裏付けられた確固たる死生観が存在した、ということである。世界を把握するための思考的枠組みが宗教から科学へと移行した近代を経て、科学的知への過度な依存を反省する現代では、良かれ悪しかれ、多種多様な死生観が併存する、あるいは、確固たる死生観が欠如している。それに対して、15、16 世紀のヨーロッパを生きた人々は、キリスト教の教義に基づく明確な死生観をもっていた[4]。その死生観を端的に表すのが、いわゆる「最後の審判」の思想である[5]。

---

[3] アルブレヒト・デューラーは、優れた研究が邦語で最も多く読める西洋の芸術家の一人である。なかでも、その生涯と作品を包括的に論じたものに次の書籍がある。フェディア・アンツェレフスキー『デューラー―人と作品』勝国興他訳、岩波書店、1982 年、アーウィン・パノフスキー『アルブレヒト・デューラー―生涯と芸術』中森義宗他訳、日貿出版社、1984 年、前川誠郎『デューラー―人と作品』、講談社、1990 年、ペーター・シュトリーダー『デューラー』清瀬みさを他訳、中央公論社、1996 年、下村耕史『アルブレヒト・デューラーの芸術』、中央公論美術出版、1997 年、ハインリッヒ・ヴェルフリン『アルブレヒト・デューラーの芸術』青山愛香他訳、中央公論美術出版、2008 年、越宏一『ヨーロッパ美術史講義―デューラーの芸術』、岩波セミナーブックス、2012 年、田辺幹之助他『ドイツ・ルネンサンスの挑戦―デューラーとクラーナハ』東京書籍、2016 年。

[4] ヨーロッパの死生観とイメージの歴史については、例えば、次の研究がある。フィリップ・アリエス『死を前にした人間』成瀬駒男訳、みすず書房、1990 年（Philippe Aries, *L'homme devant la mort*, Paris, 1977）、フィリップ・アリエス『図説死の文化史―ひとは死をどのように生きたか』福井憲彦訳、日本エディタースクール出版部、1990 年（Philippe Aries, *Images de l'homme devant la mort*, Paris, 1983）、エルウィン・パノフスキー『墓の彫刻―死にたち向かった精神の様態』若桑みどり他訳、哲学書房、1996 年（Erwin Panofsly, *Tomb Sculpture: Four Lectures on Its Changing Aspects from Ancient Egypt to Bernini*, London, 1992)、フィリップ・アリエス『死と歴史―西欧中世から現代へ』伊藤晃他訳、新装版、みすず書房、2006 年（Philippe Aries, *Essais sur l'histoire de la mort en Occident: Du Moyen Âge à nos jours*, Paris, 1975）、小池寿子『死を見つめる美術史』、ちくま文庫、2006 年、小佐野重利他編『死生学』4「死と死後をめぐるイメージと文化」、東京大学出版会、2008 年。

[5] キリスト教については、次の簡便で優れた事典がある。大貫隆他編『岩波キリスト教辞典』、岩波書店、2002 年。

キリスト教の聖典『新約聖書』には、例えば、次のような一節がある。

「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、羊を右に、山羊を左に置く。そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』（中略）『わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』それから、王は左側にいる人たちにも言う。『呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせず、のどが渇いたときに飲ませず、旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気のとき、牢にいたときに、訪ねてくれなかったからだ。』（中略）『この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである』こうして、この者どもは永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかるのである。」（『新約聖書』「マタイによる福音書」25 章 31―46 節）[6]

つまり、終末の時が来ると、イエス・キリストは天使たちを伴って地上に再びその姿を現す。そして、生きとし生けるすべての民に加えて、死者も皆よみがり（『新約聖書』「ヨハネの黙示録」20：13）[7]、イエスに裁かれる。良き行いをして生きた者は天国に迎えられ永遠の至福をえる一方、悪しき行いをして生きた者は地獄に送られ永遠の責め苦を受けるのである。この教えに従えば、死とは一過性の出来事に過ぎない。肝要なのは、キリスト者として正しい生を生き、「最後の審判」において天国行きの資格を得ることであった。死とは、生と「最後の審判」の間にある、いわば、仮の眠りであった。なお、宗教改革以前には、聖職者が死の床にある者の元を訪れ、これまでの人生で犯した罪に対して赦しを与える「終油の秘跡」と呼ばれる儀式が、広く執り行われていた。

もう一つ知っておくべきは、本稿が論ずる 15、16 世紀のヨーロッパにおいては、「絵画」制作の在り方も現代とは大きく異なっていたことである。材料費、とりわけ、絵の具に用いる顔料が高価だったことから、油彩画や壁画など顔料を豊富に用いる絵画は一種の贅沢品であり、注文内容と対価に関する契約が職業画家と注文主の間で取り交わされて初めて、制作された。加えて、絵画は享楽のためではなく、なんらかの社会的効用を果たすべきものという通念があった。具体的には、キリスト教の宗教実践に供される宗教画、個人の相貌を記録する肖像画、公的施設を飾る訓戒画、古典的教養を示す神話画などが主流であり、風景や花々の描写はこうした絵画の背景や小道具であって、それらを専ら描きその美しさを愛でるための風景画や静物画は、独立した絵画ジャンルとしては未だ確立していなかったのである。

---

[6] 『聖書―新共同訳・旧約聖書続編つき』日本聖書協会、2004 年、（新）50―51 頁。
[7] 前掲書（注 6）、（新）477 頁。

既存の絵画ジャンルのなかで、「病や死に際する重篤な心の痛みの緩和」に深くかかわっていたのは、キリスト教主題の宗教画である。教会の祭壇を荘厳する祭壇画、イエスや諸聖人の生涯を絵解きした物語画、私的な瞑想に用いられた祈念画、故人の生と死を記録した墓碑画など、当時の宗教画は多岐にわたっていた。社会の至る所に、敬神やキリスト者としての正しき行いを促し、生の終焉、そしてその後に来る「最後の審判」への備えを想起させる絵画が溢れていたのである。前述の通り、当時の人々の最大の関心事は、キリスト者として正しい生を送り「最後の審判」で天国に迎えられることであり、病や死の苦しみはその通過点の一つであった。つまり、世に溢れる宗教画は、それぞれのやり方で、観る者に生の終焉に際しての心の痛みにも備えさせ、それを緩和させる機能を果たしていたと考えらえる。すなわち、絵を見て心を慰める行為は、日々の生活のなかにすでに組み込まれていたといえる。

２.「絵を描いてもらうこと」と心の癒し―デューラー作《ランダウアー祭壇画》を例に

さて、さきほど、近世ヨーロッパにおいて、絵画は贅沢品であり、大抵は注文によって制作されたと述べた。腕の良い画家への報酬は一層高額であったが、それにもかかわらず、キリスト者としての信仰心の表明と「最後の審判」での救済への希求、社会的地位や富の顕示、または、蓄財の社会への還元といった宗教的かつ社会的理由から、王侯貴族や都市の富裕層はこぞって優れた画家たちに宗教画を注文し、自身がおかれた境遇や宗教的心情に合致した絵を描いてもらったのである。こうして生まれた数ある宗教画の傑作のなかでも、本稿が注目したいのは、自らの老いと死、そして家系の断絶を意識した一人の豪商がデューラーに注文した《ランダウアー祭壇画》（図１）である。本作品についてはかつて拙稿をしたためたが[8]、ここでは、「絵を描いてもらうこと」と心の癒しの観点から改めて取り上げたい。

現在、ウィーン美術史美術館に所蔵されている《ランダウアー祭壇画》は、菩提樹材を支持体とする縦 135 cm、横 123.4 cm の板絵である[9]。まず、描かれているモチーフを確認しよう[10]。画面上半中央には、磔刑に処されたイエス、十字架を両手で支える父なる神、聖霊を表す鳩によって「聖三位一体」が表わされている。「聖三位一体」とは、父なる神とその子であるイエス、そして聖霊という三つの位格は、神という一つの本質

---

[8] 平川佳世「デューラー作《ランダウアー祭壇画》をめぐって―ニュルンベルクにおける画家と彫刻家」『西洋美術研究』7 号「美術とパラゴーネ」、2002 年、24―56 頁。

[9] 本作品の基本情報は、以下にまとめられている。Fedja Anzelewsky, *Albrecht Dürer: Das malerische Werk*, Berlin, 1971, 2nd ed. 1991, pp. 230-233, cat. no. 118.

[10] 西洋美術史研究では、描かれたモチーフや主題の意味や文学的典拠を研究する図像学とよばれる研究分野がある。これまでの図像学研究の成果は、「図像学事典」として刊行されている。邦語に訳された簡便な図像学事典に次のものがある。ジェイムズ・ホール『西洋美術読解事典―絵画・彫刻における主題と象徴』高橋達史他訳、河出書房新社、1998 年。

として完全に交流し一致するという、キリスト教会において正統とされる教義である[11]。画中では、「聖三位一体」の周りを天使達が幾重にも取り囲む。画面に向って左側には、聖母マリアに率いられた女性聖人たちが、信仰の勝利を表す棕櫚の葉を手に集まる。向って右側には、洗礼者聖ヨハネを先頭に、竪琴を弾くダヴィデ王、十戒の石板を手にした預言者モーセなど『旧約聖書』に登場する王や預言者、巫女たちが続く。聖なる集団の下では、教皇や諸王、騎士から修道士や市民、農民に至るまで、様々な階層に属する良きキリスト教徒たちが「聖三位一体」を跪拝する栄誉に預かっている。そして、天空に現れた聖なる一群と雲により分かたれた下界には美しい風景が広がり、人々の生の営みが行われていることを湖畔に築かれた都市が示唆している。

図 1：デューラー《ランダウアー祭壇画》1511 年
油彩、菩提樹材、135×123.4 cm、ウィーン、美術史美術館

本作品の注文の経緯は次の通りである。鉱業により巨万の富を築いたニュルンベルクの豪商マテウス・ランダウアーは、妻の死後まもなくの 1501 年 11 月 18 日、ニュルンベルクのラウファー門に隣接する土地を市から総額 210 グルデンで購入し、身寄りもなく生計をたてることが出来ない 12 人の年老いたニュルンベルク市民の職人たちが賄い付きで生涯住まうことができる「十二兄弟院（Zwölfbrüderhaus）」を建設する許可をえた。1507 年頃、養老院は完成した。建物には「聖三位一体」と諸聖人に捧げられた礼拝堂が付属しており、1510 年に制定された会則により、養老院の入居者は毎食後、平日は礼拝堂で、日、祝日は近隣の教会へ赴いて共に祈ることが義務づけられている。マテウス・ランダウアー自身、1510 年 10 月 6 日に同院へ入居し、1512 年には財産をすべて十二兄弟院に寄付する公証文書を作成、翌年には死後の同院の管理を甥のヴィルヘルム・シュリュッセルフェルダーに委託して 1515 年に世を去り、付属礼拝堂に埋葬

[11] 大貫他、前掲書（注 5）、454－455 頁。

されたのであった[12]。

この十二兄弟院付属礼拝堂のために、マテウス・ランダウアーがデューラーに注文したのが《ランダウアー祭壇画》である。祭壇画が完成したのは、画中に書き込まれた年記から 1511 年とわかる。一方、完成作とほぼ同じ絵柄がペンと淡彩で描かれた、1508 年の年記をもつ素描が伝わる（図２）[13]。この水彩素描は、画家と注文主が契約の前後に取り交わす「モデッロ（雛形素描）」と呼ばれる、完成作の見本の役割を果たす素描であった。このモデッロの存在から、1507 年頃の養老院完成後の早い時期に、マテウス・ランダウアーは、ニュルンベルクに工房を構え汎ヨーロッパ的な名声を獲得していたデューラーに、祭壇画を依頼したことがわかる。契約に関する文字資料は伝わっていないが、マテウスが惜しみない報酬を支払ったであろうことは、画中にふんだんに使用された金の顔料や、デューラーが祭壇画の額縁に加えて、礼拝堂を飾るステンドグラスのデザインまでも行っていることから、窺える[14]。

図 2：デューラー《「ランダウアー祭壇画」のための雛形素描》1508 年
ペン、インク、水彩、39.1×26.3 cm、シャンティイ、コンデ美術館蔵

---

12 マテウス・ランダウアーについては、次の文献に詳しい。Joachim Ahlborn, *Die Familie Landauer*, Nuremberg, 1969, pp. 101-114.

13 この素描の基本情報については以下を参照のこと。Friedrich Winkler, *Die Zeichnungen Albrecht Dürers,* 4 vols, Berlin, 1936-1939, vol. 2, pp. 118-119, cat. no. 445.

14 礼拝堂装飾全体へのデューラーの関与とその意図については、先の拙稿を参照されたい。平川、前掲書（注 8）。

十二兄弟院設立をめぐるマテウス・ランダウアーの一連の行為は、今風にいうと、「終活」である。1451 年生まれのマテウスが養老院建設に着手したのは五十歳の頃、妻の死や当時の寿命を考えれば、自身の死を意識してもおかしくはない年齢であった。死を意識した富裕層にとって大きな問題となるのが、貪欲の誹りである。「最後の審判」で必ず地獄に堕ちると信じられていた、いわゆる「七つの大罪」には貪欲、すなわち、他者を押しのけて私服を肥やす過剰な蓄財行為が含まれていた[15]。富裕層にとって、社会的弱者のために養老院を建立することは、過剰な蓄財を社会へ還元し隣人を救う行為、つまり、貪欲の罪を逃れて「最後の審判」で天国へ行くための有効な手段であった。さきほど紹介した「最後の審判」についての聖書の記述にも明らかなように、隣人愛はイエスの教えの中核を占める。

加えて、ランダウアー家には特別な問題もあった。実は、マテウスには男子の後継がおらず、ランダウアー家はマテウスの代で断絶する運命にあったのである。それゆえ、六十歳を迎えるころ、マテウスは自らも養老院へ入居し、全財産を養老院へ遺贈する手続きを整えて、1515 年、六十四歳の生涯を閉じたのである。マテウス・ランダウアーは、「最後の審判」での天国行きを確かなものにして心穏やかな死を迎えるために、養老院の建設と運営を通じて隣人愛という徳を実践し、礼拝堂を付設し日々の祈りを行うことで篤い信仰心を示したのである。

以上の経緯を鑑みるに、十二兄弟院付属礼拝堂の祭壇画である《ランダウアー祭壇画》は、マテウス・ランダウアーが死に向かう心の備えのためになした一連の行為の核となる絵画といえる。礼拝堂が「聖三位一体」と諸聖人たちに献堂されたことにちなみ、画題として選択されたのは、「聖三位一体」を礼拝する諸聖人たちと良きキリスト教徒たちであった。この、「万聖図」あるいは「諸聖人の集い」と呼ばれる図像は、『新約聖書』「ヨハネの黙示録」（7 章 9－11 節）で語られる神を礼拝するあらゆるキリスト者たちの記述を典拠とし、天国の様子を表すものとして、当時、様々な変奏を伴いながら、造形化されていた[16]。ここで、私たちが注目したいのは、跪拝する様々な身分の良きキリスト者たちの末席に、マテウス・ランダウアー本人が描かれていることである。帽子を手に、一心に祈りを捧げる姿に肖似性と迫真性を持たせるために、デューラーはマテウスの顔貌をつぶさに写し取った習作素描を制作している（図３）[17]。本祭壇画は、老マテウスが希求する望みを見事に造形化した絵といえる。死へと向かう日々のなかで、祭壇画を前に神に祈りを捧げる行為は、マテウスの心に大きな安らぎをもたらしたに違いない。ここに、前近代のヨーロッパにおける「絵を描いてもらうこと」と心の癒しの典型的な関係が見てとれるのである。

---

[15] 大貫他、前掲書（注 5）、835―836 頁

[16] 例えば、ホール、前掲書（注 10）の「諸聖人の集い」の項目を参照されたい。

[17] この素描の基本情報については以下を参照のこと。Winkler, *op. cit.* (n. 13), vol. 2, p. 156, cat. no. 511.

図 3：デューラー《「ランダウアー祭壇画」のための習作「マテウス・ランダウアーの肖像」》1511 年、木炭、27.2×18.9 cm、フランクフルト、シュテーデル美術館

３．「絵を描くこと」と心の癒し―デューラー作《母の肖像素描》を例に

それでは、《ランダウアー祭壇画》を卓越した技量で完成させたデューラー本人にとって、「絵を描くこと」はどのような意味をなしたのであろうか。デューラーは未完に終わった『絵画論』の目次において、絵を描くことの効用を次のように記している。

「第 1 節　それは神的で、宗教的な優れた訓戒に利用されるので、有益な学芸である。
第 2 節　それは有益である。人が諸学芸に打ち込めば、多くの悪はそれによって避けられる。そうでなく人が無益に過ごせば、それらは生じる。
第 3 節　人が何も考えなくともそれに没頭さえすれば、それはそれ自体で非常に多くの喜びとなるので、それは有益である。大きな喜びがそれにはある。
第 4 節　それは有益である。それが正しく使用されれば、それから永遠に記念すべき偉大なことがなしとげられる。
第 5 節　神がこのような学識を具備せる被造物にこれほどの知性を賦与するのを人がみれば、神はそのことで崇敬されるので、それは有益である。また賢人達は全て学識の故に汝に好意をもつ。

第 6 節　それは、もし汝が貧乏になったときには、このような学芸によって大きな財産を得ることができるので、有益である。」[18]

絵画術の有益さは、世にキリスト教の教えを広めることに加え、悪徳から遠ざけつつ描き手に大きな喜びを与え、世の人々からの尊敬、永遠の名声、金銭的な豊かさをもたらすことにある、とデューラーは述べる。実際、《ランダウアー祭壇画》の下方右隅には、「ニュルンベルクのアルブレヒト・デューラーが聖処女のご出産の後 1511 年に制作した」[19]とのラテン語の文章と画家のモノグラムが刻まれた銘板を手にしたデューラーが、誇らしげに佇んでいる（図４）。

図４　図１部分

[18] アルブレヒト・デューラー『絵画論―注解』下村耕史訳編、中央公論美術出版、2001 年、87－88 頁。ドイツ語の原文は次の通り。“Zum ersten, es ist ein nutze kunst, wan sie ist gottlich vnd wurt geprawcht zw guter hellger manvng. Zum anderen ist sy nütz. Vill vbells gwürd dordurch ver miten, so man in künsten vm gett, dz sunst gschehen, so man feirt. Zum tritten ist sy nütz, wan nymant glawbt, dan so man mit vm get, daz jn jr selbs so frewden reich ist; grosse frewd hatt sy. Zum firten ist sy nütz, man erlangt grosser vnd ewiger gedechtnus dorfon, so mans ordenlich prawcht. Zum fünfften ist sÿ nütz, wan gott wirt dordurch geert, wo man sicht, das gott einer gkreatur sollich vernunft verleicht, der solliche kunst in jm hat vnd alle weis werden dir holt vm dein kunst. Zum sext nutzperkeit, ob du arm werst, so magstu durch eyn sollich kunst zu grossem gut vnd hab kumen.” Hans Rupprich, *Dürer: Schriftlicher Nachlass*, 3 vols., Berlin, 1956, vol. 2, pp. 103-104.

[19] ラテン語の原文は次の通り。“ALBERTUS DVRER NORICVS FACIEBAT ANNO A VIRGINIS PARTV 1511.”

注文制作が主であった前近代において、油彩画に画家の心情が直截的に表現されることはめったにない。そうした私的な感情の迸りは、むしろ、紙にペンや木炭で描かれた素描に見てとれる。デューラーは、家族や友人の肖像素描を多く手掛けているが、ここで注目したいのは《母の肖像》である（図５）。本素描では、卓越した木炭の動きによって、年老いた母の相貌から、皺や眉といった細部、癖のある鋭い眼差しまでが、克明に写し取られている。素描には 1514 年の年記と「3 月 19 日。これはアルブレヒト・デューラーの母であり、彼女は六十三才であった。」という文がデューラー自身の手によって書き込まれている。さらに、その下には、同じく画家の手によって、「そして 1514 年十字架の週の前の火曜日の夜半二時に亡くなった。」と加えられた[20]。

病や死の苦しみが究極の至福へと至る通過点であるという確固たる死生観に支えられていたとはいえ、死にゆく者を看取る心の痛みや悲嘆は、当時の人々にとっても同様であった。このことは、デューラーが残した『覚書』から窺い知ることができる。彼は母の発病と臨終について次のように記す。

図５：デューラー《母の肖像》1514 年
木炭、紙、42.1×30.3 ㎝、ベルリン銅版画室蔵

[20] ドイツ語の原文は次の通り。“an oculy Dz ist albrecht dürers mutter dy was alt 63 Jor”; “und ist verschiden Im 1514 Jor am erchtag vor der crewtzwochen vm zwey genacht.” Winkler, *op. cit.* (n. 13), vol. 3, pp. 28-29, cat. no. W.559.

「さて皆に知っておいて貰いたいことがある。私が父の死後二年して、私の家に引き取って世話をし、九年間わが家にいた貧しく孤独な母が、1513 年の祈願節週の前の火曜日（4 月 26 日）の早朝突然死病に罹り、自分では開けることができないので、家人は扉を毀して彼女の傍に行かざるを得なかった。（中略）母が発病した上記の日から一年余り経ったある火曜日、即ち、［キリスト降誕より］算えて 1514 年 5 月 17 日の夜の二時間前に、わが信仰深き母バルバラ・デューラー夫人はすべての聖体を受け、教皇の力で一切の苦痛と罪障から解き放たれて、キリスト者として世を去った。彼女は予め私にも祝福を与え、私が罪障から守られてあるよう、極めて美しい訓えをもって私に神の平安のあるよう祈った。（中略）母は死神をひどく怖れていたが、神の御前に行くことは恐くないと言った。彼女は大そう苦しんで死んだ。（中略）私はまた死神が彼女の心臓に二撞き大きな打撃を加え、彼女が口と両眼とを閉じ、苦痛をもってこと切れるのを見た。私は母の前で［祈祷文を］朗唱した。そのとき私は口には表し得ないような苦しみを覚えた。神よ、彼女に恩寵を垂れ給え。（中略）彼女は死んだとき六十三歳であった。（中略）主なる神よ、私もまた、幸福な臨終を遂げ、神が天上の軍勢と、わが父母と親族とを伴って私の臨終に来給い、万能の神御自らわれらに永遠の生を与え給わんことを私に許し給え。アーメン。母は死顔において、彼女がまだ生命あるときよりもはるかに美しく見えた。」[21]

この文章から読みとれるのは、信仰という心の支えを得てもなお拭えぬ死の恐怖と苦痛、死にゆく者が遺される者へ向ける深い愛情、そして、自らの死の際には亡くなった者たちに再会したいと希う遺された者の哀惜の念である。デューラーの母が重い病に倒れたのは、1513 年の 4 月であり、亡くなったのは翌年 5 月であるから、《母の肖像》は、母が亡くなるおよそ二か月前、病がいよいよ重篤になり、周りが死を覚悟するころに制作されたといえる。濃淡と強弱を巧みに織り交ぜた迷いのない線で一気呵成に描かれた本素描は、数あるデューラーの肖像素描のなかでも卓越した質を備えている。その

[21] アルブレヒト・デューラー『デューラーの手紙』前川誠郎（訳・注）、中央公論美術出版、1999 年、23－29、特に 26－28 頁。ドイツ語の原文は次の通り。“Nun solt jr wissen, daz im jar 1513 an einem Erchdag vor der Crewczwochen mein arme elende muter, dÿ ich zweÿ jor noch meines vaters dott zw mir nam, dÿ do gancz armm was, jn mein fleg, noch dem sy 9 jor was peÿ mir gewest, an eim morgen frw jehling also töttlich kranck ward, daz wir dy kamer awff prachen, dan wir sunst, so sy nit awff kunt than, nit zw jr kunten. [...] Van dem an, an dem vor bestÿmten dag, als sÿ kranck ist worden, über ein jor, do man czalt 1514 jor, an einem Erchdag, was der 17. dag jm Meÿen, zwu stund vor nacht, jst mein frume muter Barbara Dürerin verschiden crÿstlich mit allen sacramenten, aws pepstlichem gewalt van pein vnd schuld geabsolfÿrt. Sÿ hat mir och for jren segen geben vnd den gotlichen frid gewünst mit vill schöner ler, awff das jch mich vor sünden solt hüten. [...] Vnd sÿ forcht den tot hart, aber sÿ saget, für gott zw kumen fürchtett sÿ sich nit. Sy ist awch hert gestorben, [...]. Ich sach awch, wÿ jr der tott zwen gros stos ans hercz gab, vnd wÿ sy mund vns awgen zw tet, vnd verschid mit schmerczen. Ich pettett jr for. Do fan hab jch solchen schmerczen gehabt, daz jchs nit aws sprechen kan. Got seÿ jr genedig. [...] Vnd sÿ was um 63. jor, do sÿ starb. […] Gott der her verleicht mir, daz jch awch ein selichs ent nem, vnd das got mit seinem himlischen her, mein vater, mutter vnd frewnd zw meinem ent wöllen kumen, vnd daz vns der allmechtig got daz ewig leben geb. Amen. Vnd jm jrem tot sach sÿ fill liblicher, dan do sÿ noch daz leben hett.” Rupprich, *op. cit.* (n. 18), vol. 1, pp. 35-38, esp. 36-37.

出来栄えからは、「十八人の子を産み育て」「非道い逆境に耐え」てなお、子供たちの「魂についていつも大きな心配りをし」何人にも「善行と慈悲」を示した[22]母の生の終焉に際して、その姿を目に焼きつけ、自らの筆で面差しをなぞり、紙面に残さんとする画家の強い意志が伝わってくる。

ここで「母は死顔において生命があるときよりもはるかに美しく見えた」という言葉を思い起こすなら、私的領域において現れる、「絵を描くという行為」と心の慰めとの繊細な関係を本素描にみいだすことができよう。注視と哀惜、記録と追憶、描く者の眼差しで死へと向かう苦しみを克明に見つめてきたからこそ感じる死者の「美しさ」。寄り添い描くことを通じて、死別の苦しみを正面から受け止め、そこから心の再生の契機を得る一連の過程を、みいだすことができるだろう。

本稿では、現代のホスピタルアートに触発されて、時を遡ること五百年前の、キリスト教文化圏における絵画と心の癒しの関係について、考察を行った。とりあげたのはたった二つの事例であり、到底満足のいくものではない。しかし、この小論が、芸術と心の癒しの新たな試みを模索する端緒となれば、幸甚である。

（図版１～５：著者蔵）

[22] デューラー前掲書（注 21）、27－28 頁。Rupprich, *op. cit.* (n. 18), vol. 1, p. 37. なお、十八人の子供のほとんどは幼い頃に亡くなり、生存しているのは自身を含め三人だけである、とデューラーは記している。デューラー前掲書（注 21）、16 頁。Rupprich, *op. cit.* (n. 18), vol. 1, p. 30. 当時の乳幼児死亡率の高さを物語る記述である。